

江戸村、明治村、日本大正村

佐々木 享

江戸村

博物館としての「江戸村」は、東京ではなく、金沢市の郊外の湯涌（ゆわく）温泉の中にある（金沢市湯湧町へノ19 TEL.0762-35-1721）。金沢駅からバスで約45分、白雲楼前下車。金沢は観光地だから観たい所は多いであろうが、できれば江戸村見学を日程に入れておきたい。

江戸村には、江戸時代に創建された一連の建築物が移築・展示されている。壮大ともいふべき本陣・人馬継立問屋（重要文化財）、本陣土蔵、珍しい江戸初期の百姓家、肝煎級百姓家、紙漉き農家などなど。紙漉農家は、建物だけでなく、古くからの紙漉関係の道具類を収集・展示しているのがすばらしい。

御医師屋敷表門、足軽（歩並）屋敷、長屋門などの間に、タカジャスターゼで知られる高峰讓吉博士の旧宅の一部だったという下級武家居宅もある。長屋門、在郷商家、大商家、大商家土蔵も往時をしのばせてくれる。曹洞宗瑞雲山康樂寺仮殿、同山門などもみごとに移築されている。

江戸村に並んで3万5千坪の檀風苑という、これも江戸期に創建された建物をふくむ施設がある。入場券は江戸村と共通。2、3の民家は別として仏教関係の施設を私ほうまく説明できない。ただし、加賀記念館「辰巳台」に、らでん、金箔などの加賀百万石の時代に成長した伝統工芸に関する製作用具が収集・展示されているのには感動した。国指定の重要民俗資料となっている。大小の、というより総数1万余点の細かな道具がじつによく集められている。ここに来ると、微細な細工を

する無名の工人のわざが道具をつくりだし、こまかな工具を精妙なできばえをもたらす、というさまを思い浮かべることができる。

日本大正村

前述の江戸村や後述の明治村がある区域を囲って一連の建築物を保存、展示しているのに対して、ここに紹介する「日本大正村」は一風変わっていて、囲の堀ではなく、現実には人が住まい商売も営まれている市街地の特定地域を「日本大正村」と称している。JR中央線の恵那で明知（あけち）鉄道に乗換えた終点の「明知」駅が、日本大正村の玄関口である。といっても通例の博物館のように入館切符を売る窓口があるわけではなく、来場者はここから三々五々歩くことになる。「日本大正村」は、いわゆる町おこし、村おこしの運動の一環として実施された成功例の一つなのだ。

街なかのそこここが大正時代（1912-1927）の風情のある建物が保存あるいは移築・公開され、またそこに収蔵・展示されている品々を思い思いに観て歩くわけである。通例の博物館と違うから途まどってしまうけれども、街ゆく人に尋ねると親切に教えてくれるのが気持ちよい。私はこの村を二度訪問したが、二度ともそういう印象をもった。また、初代村長の高峰三枝子の唯一の注文だった由で、入村者のための駐車場のトイレが風情があってきれいなのも好印象を与える。

街全体が博物館だといわれ、なる程「大正路地」と称する細い道を歩いているとその感があるけれども、むろん、観るべき建築物や

施設も少なくない。1957年まで町役場に使われていたという古い時代の雰囲気をよく遺した日本大正村役場、その前の坂を少し登ったところにある山本芳翠記念館、その上に移築・復元された三宅家旧宅などなど。

銀行蔵と隣の旧医家宅に少し手を入れて公開した「日本大正村資料館」は、入館してみると意外に広くて展示物が充実していて、あちこちにある村の博物館の展示にひけをとることはない。

たとえば、大正村資料館には、各種の民具だけでなく、古い時代の新聞、とうに見られなくなった蓄音機のコレクション、この近辺から集められたという子どもの玩具としての土人形のコレクションなどなど、を楽しむことができる。

歩き疲れたら、京都の「カフェー天久」を移築した「天久資料館」で休息することをお勧めする。ゆったりコーヒーを飲み、2階の竹久夢二の絵を楽しむことができる。

(博物館) 明治村

明治時代（一部には関東大震災以前の大正期をふくむ）に建築された建物を緑に囲まれた100万㎡という広大な地域に移築・展示しているのが博物館明治村（以下、たんに明治村という）である。恐らく、現代日本では最も大規模な、最も充実した野外博物館ではなかろうか。名古屋に住む私どもへの遠来の客にもし日程の余裕があるときには、この明治村をご案内することにしている。（名古屋は徹底した戦災に逢ったので、市内にはいわゆる名所旧跡が極端に少ないためでもある。）

明治村行きの交通機関は、名古屋駅から名鉄犬山線で犬山に行き、そこで明治村行きのバスに乗り換えるか、名古屋駅の名鉄バスセンターから明治村行きの直行バスを利用する。1時間と少しかかる。もちろん、広い駐車場もある。ただし、毎週金曜日が定休日なので要注意。

旧制八高（名古屋にあった第八高等学校）か

ら移築した赤れんがの風格ある門が、観覧者を迎えてくれる。観覧者を案内するいわゆる動線はなく、どこからみてもよいけれども、館側としては、南側をI号地とし北側までをVII号地まで分けている。1965年に開館した当時は15棟しかなかったのに、毎年のように移築されたものが増加し、いまは60棟以上にふえており、まる1日かけても、全部をゆっくり観ることは難しかろう。国の重要文化財（重文）に指定されている施設だけでも9棟以上ある。

I号地には、三重県庁舎（重文）、鉄道局新橋工場と明治天皇・昭憲皇太后御料車、明治期を扱った文学作品によく出てくる大井牛肉店、聖ヨハネ教会堂（重文）、近代建築史上必ずといってよい程登場する西郷従道邸（重文）、文豪といわれる人がこんな小さな家にと驚かされる森鷗外・夏目漱石の住んだ家などがある。

II号地には、札幌電話交換局（重文）、東松家住宅（重文）、金沢にあった第四高等学校物理化学教室、東山梨郡役場（重文）などがある。この京都市電は動態保存なので、V号地の鉄道寮新橋工場まで乗ることができる。

III号地には日本赤十字社中央病院棟など7棟。ここには歩兵第六聯隊兵舎があり、内務班の施設が再現されているので、感慨にふける老人は多い。ブラジル移民住宅などの珍しい建物もある。

V号地には鉄道寮新橋工場・機械館、近代産業発祥の頃を伝える工部省品川硝子製造所など3棟。機械館と称するのは、ここには、技教研の創立発起人の1人であった故山崎俊雄氏も協力して収集した機械類が展示されているからである。

VI号地には、呉服座等がある。

紙幅の関係で乱暴だがVII号地以下を省略せざるを得ない。この博物館は名古屋鉄道の資力と建築（史）家故谷口吉郎のアイデアとが実って創建されたものである。近代日本にもようやく壮大な博物館をつくる資本家が現れたことの証（あかし）がここにある。（名古屋大学）